



## 経営研究におけるアクセラレーターにかかる研究動向 : Hist Citeによるシステマティック・レビュー

著者	関 智宏, 田代 智治
雑誌名	同志社商学
巻	74
号	1
ページ	47-69
発行年	2022-06-30
権利	同志社大学商学会
URL	<a href="http://doi.org/10.14988/00029051">http://doi.org/10.14988/00029051</a>

# 経営研究におけるアクセラレーターにかかる研究動向

—Hist Cite によるシステマティック・レビュー—

関 智 宏<sup>†</sup>  
田 代 智 治<sup>††</sup>

- I はじめに
- II 方法——論文のマッピング
- III 結果
- IV ディスカッション
- V 小結

## I はじめに

比較的最近の現象であるアクセラレーター (accelerator) は、企 (起) 業家ならびにスタートアップを支援する新しい形態の仲介者として世界中から注目を集め、実際に起業やイノベーション活動を支援するうえでの重要な担い手となっている (Crisan et al., 2019)。2005 年に米国を拠点とするアクセラレーター<sup>1</sup>が世界ではじめて設立されて以来、その数は 2008 年以降に本格的に伸び続け、2016 年には世界中に 3,000 以上のアクセラレーターが存在し (Hochberg, 2016)、2018 年には 7,000 社以上のスタートアップ<sup>2</sup>に資金が提供された (Seed-DB, 2018)。また、2005 年から 2015 年の間に米国を拠点とする 172 ものアクセラレーターが存在することになるが、彼らは後に世界的企業へと成長を遂げた Dropbox, AirBnB を含む 5,000 を超えるスタートアップに投資し、これら新興企業がアクセラレーター・プログラムを通じて、合計 195 億ドルもの資金を調達する

<sup>†</sup>同志社大学商学部 教授

<sup>††</sup>長崎県立大学経営学部 准教授

- 1 2005 年よりシリコンバレーを拠点としてスタートした Y Combinator は、世界で最初にシード・アクセラレーター・プログラムを開始し、続いて翌年コロラド州ボルダーで TechStars がスタートすることになる (Hathaway, 2016)。現在この 2 つの組織は、米国を代表するアクセラレーターとなっている。また、2010 年には米国の TechStars が主導してアクセラレーターの業界団体「Global Accelerator Network (GAN)」が創設された。
- 2 スタートアップとは、初期の革新的なベンチャー企業や中小企業であり、創業から 2~3 年の企業を指すことが多い。Ojaghi et al. (2019) は、スタートアップとは、経済やスマートシティの原動力としての役割を果たすための企業であるとの認識に変化しているとし、発展途上国での雇用創出のための有効なメカニズムとしても期待されていると説明する。エコシステムにおけるスタートアップの急増は、長期的には斬新的で革新的である多様なアクターを創出するとの指摘もある (Ojaghi et al., 2019)。本研究におけるスタートアップの定義もこれに準ずるものである。

ことに寄与したとされる (Hathaway, 2016)。このように短期間にもかかわらず、アクセラレーターは企(起)業家を取り巻くエコシステムの成長発展に大きな影響を与え (Drori and Wright, 2018)、現在では、イノベーション促進に関連するコミュニティにおいて中心的役割を担おうとしている。

これまで、起業やイノベーション活動を支援する組織は、技術革新に重要とされる情報などの普及・提供に貢献してきた長い歴史を持つが、アントレプレナーシップ研究には関係のないものとして扱われてきた側面がある (Howells, 2006)。特に、日本国内を振り返ると、アクセラレーターを対象にした研究は、その文献数をみても僅かばかりに留まっており、学術的理解と研究がまったくといってよいほど進んでいない状況が見受けられる (田代・岸本, 2021)。一方、実務面では、国際的のみならず、近年では、日本国内においてもアクセラレーターの重要性が認識されはじめ、その数は増加傾向にあると言えよう。これらのように指摘できる研究上のギャップを埋める必要がある。

筆者の1人である田代は、別稿にて、国際ジャーナルの議論から、アクセラレーターのエコシステムでの位置づけの捉え方を検討し、アクセラレーターとは、エコシステムのなかに位置づけられた「限られた期間のなかでの集合的かつ集中的な教育、メンタリングを通して、初期ステージの成長指向型の企業(スタートアップ)を支援し成長を加速させることを目的とした中間組織 (Intermediary Organizations)」であると定義づけるとともに、その役割と特徴を明らかにした (田代・岸本, 2021)<sup>4</sup>。そのなかで、アクセラレーターとは、その特徴の多くをインキュベータや他の中間組織から受け継いでいるものの、そのプログラムには際立った特徴があることから新しい組織と捉えることができる一方で、各論者の学術視点や研究背景によってアクセラレーターの特徴や定義について細かい点での相違が存在し、その捉え方や認識などにも違いが発生していること<sup>5</sup>を

3 エコシステムとは、「起業を生み出すアクターや組織、機関、起業を生み出すプロセスが相互に結びついた集合体であり、それらが公式・非公式に融合しつつ、地域における起業を生み出す環境内のパフォーマンスを結びつけ、媒介し、統御するものである」と定義される (Mason and Brown, 2014, p.5)。

4 田代・岸本 (2021) は、エコシステムにおける他の中間組織 (Intermediary Organizations) には見られない際立った特徴として、以下の7点を指摘した (田代・岸本, 2021)。まずおもだった特徴としては、次の3点がある。第1に、期間が限定された (通常3ヵ月から6ヵ月) アクセラレーター・プログラムであること、第2に、複数のスタートアップで構成される小規模なチーム (コホート) を対象としていること、第3に、多様なアクターによる集中的メンタリングがみられること、である。これらは換言すると、アクセラレーターが、積極的な競争環境といった「場」の創出を行ったうえで、そのなかで構造的で意図されたネットワークの機会を提供していると考えられる。また、その他の特徴として、第4に、アクセラレーター・プログラムにはプログラム化された各種イベントが設定されており、多くの場合スタートアップが投資家といった資金提供者に対して行うピッチや最終的なデモ・デーが存在すること、第5に、アクセラレーターは株式と引き換えにプレシード投資を提供する場合があること、第6に、場合によって、アクセラレーターは、物理的なリソースやオフィスサポートサービスをともなうことがあるが、長期間にわたってこれらを提供することを主目的としていないこと、第7に、アクセラレーター・プログラムに参加するためには事前に競争的な選抜プロセスを経る必要があること、がある。

5 例えば、国際ジャーナルの議論では、アクセラレーターをインキュベータの進化系として捉えるか、

確認した（田代・岸本，2021）。

これらの相違が生じている原因の1つには、先立って検討したさいにとりあげた国際ジャーナルの文献が、必ずしも厳格なシステマティック・レビューの手順に基づいて収集されたものでないためでもあると考えられる。そこで本研究では、アクセラレーターにかかる文献を体系的に整理し、その研究潮流を確認していく。具体的には、システマティック・レビューとして Hist Cite をもちいた引用分析を行い、その研究潮流を明らかにしていく。

## II 方法——論文のマッピング<sup>6</sup>

科学的知識の成果が広く知られるための手段の1つは文献の公表である。広範囲の領域にまたがって数多く存在する文献のなかで、おもな領域を特定するためには、文献の体系的なレビュー、すなわちシステマティック・レビューを行う必要がある（Kraus et al., 2014; Xi et al., 2015）。システマティック・レビューは、検討対象の文献を恣意的に選択する方法とは異なり、透明性かつ再現性があることを確認することができるために推奨された方法として知られている（Liñán and Fayolle, 2015; Pittaway and Cope, 2007; Tranfield et al., 2003）。

システマティック・レビューのためにもちいられる分析方法として、書誌学（bibliometrics）における手法の1つである引用分析があげられる（Liñán and Fayolle, 2015; Xi et al., 2015）。引用は、科学的なアイデアの概念的な相互関係を可視化するものとされている（Garfield, 1979; Small, 1978）。引用分析を行うことによって、引用と引用された著者や出版物との関係や、分析に用いた出版物のなかで、どの引用元の影響が大きいかを明らかにすることができる（Gundolf and Filser, 2013）。

そこで本節では、アクセラレーターに関連した文献の体系的なレビューを行うための、本研究における検討対象の選定方法を説明していく。具体的には、論文の収集方法、また収集した論文のデータベースを基に行った引用分析の方法について説明する。

### II-1. データの収集と選定

レビュー対象となる論文を収集するにあたって、Clarivate社の分析ツールであるWeb of Science<sup>TM</sup>のプラットフォーム（Version 5.35）を活用した。Web of Science<sup>TM</sup>で

ゝ もしくは、実際の現象面より確認、認識される組織特性からそれとは別形態の組織と捉えるかといった学術動向が見受けられるものの、田代・岸本（2021）でとりあげた国際ジャーナルの文献では、この2つの学術的な動向を区分できるほどの大きな差を確認することができなかった。

6 本節の一部は、関（2021）ならびに関・曾我（2022）に基づく。

は、いくつかのキーワードを入力して文献を検索するが、ここではアクセラレーターの英語表記である「accelerator」をキーワードとした。キーワードが1語であるのは、まだこのアクセラレーターのテーマそれ自体が新興のものであると推察したことによる。検索は2021年6月7日に行った。

Web of Science™では、いくつかの条件を指定することで検索結果を絞り込むことができる。そこでドキュメントタイプをARTICLEとBOOK CHAPTERの2つとした。システマティック・レビューの対象には、「検証済みの知識」としてのジャーナル論文のみとすることがあるが(Podsakoff et al., 2005)、本研究が対象とするアクセラレーターのようない新興の研究テーマでは、書籍にも論文が掲載されることも多くあるため、本研究の検討対象にBOOK CHAPTERを加えることにし、ARTICLEも含めて本研究ではこれらを総称して論文と呼ぶ。検索の結果、228本の論文が抽出された。この論文のデータをマークリストに保存し、かつ引用文献も含めるようにしたうえで、エクセルデータとテキストデータに落とし込んだ。

## II-2. 影響の大きい関連文献の追加

「accelerator」をキーワードに含んでいない論文は、Web of Science™での検索では拾いあげることができず、またWeb of Science™に登録されていない論文もまた拾いあげることができないため、本研究に関連する論文を包括的に収集できていない可能性が考えられた。そこで、影響の大きい論文を含めることにした。

Web of Science™から落とし込んだテキストデータを、引用分析のソフトであるHistCite™ (Version 12.03.17)にインポートした。そして、HistCite™のCite Reference機能を使って被引用件数(レコード)を確認したところ、これが「11」以上となる論文は46本であった。このなかに一部であるが、書籍やWorking Paperに該当するものが11本ほど含まれていたため(うち1本は重複)、これらを論文のデータから除外した<sup>8</sup>。この時点で論文数は35本となった。この影響力のある35本の論文のリストを示したものが、表1である。

7 HistCite™ (Version 12.03.17)を使用したPCのブラウザはInternet Explorer (IE)の (Version 11)であるが、HistCite™を動かすためには、IEの設定と、さらに変換するテキストデータの一部タイトルの変更が必要となる。この点については、関(2021)ならびに関・曾我(2022)を参照のこと。

8 Academy of Management Proceedingsに掲載された論文が1本(Hallen et al. (2014))でなお被引用件数は15)あったが、引用文献が掲載されていないため、検討対象に含めなかった。

表1 検討対象として追加する論文のリスト

	著者	刊行年	ジャーナル	被引用件数
1	Pauwels et al.	2016	Technovation	54
2	Cohen	2013	Innovations	36
3	Kohler	2016	Busienss Horizons	30
4	Bruneel et al.	2012	Technovation	27
5	Eisenhardt	1989	Academy of Management Review	26
6	Hackett and Dilts	2004	Journal of Technology Transfer	26
7	Grimaldi and Grandi	2005	Technovation	25
8	Hochberg	2016	Innovation Policy and the Economy	25
9	Weiblen and Chesbrough	2015	California Management Review	24
10	Phan et al.	2005	Journal of Business Venturing	22
11	Mian et al.	2016	Technovation	21
12	Radojevič-Kelley and Hoffman	2012	Small Business Institute Journal	21
13	Cohen and Levinthal	1990	Administrative Science Quarterly	19
14	Gonzalez-Urbe and Leatherbee	2018	Review of Financial Studies	19
15	Bergek and Norrman	2008	Technovation	17
16	Goswami et al.	2018	Strategic Entrepreneurship Journal	16
17	Isenberg	2010	Harvard Business Review	16
18	Spigel	2017	Entrepreneurship Theory and Practice	15
19	Amezcuea et al.	2013	Academy of Management Journal	14
20	Barbero et al.	2014	Journal of Technology Transfer	14
21	Isabelle	2013	Technology Innovation Management Review	14
22	Kanbach and Stubner	2016	Journal of Applied Business Research	14
23	Aernoudt	2004	Small Business Economics	13
24	Autio et al.	2014	Research Policy	13
25	Eisenhardt and Graebner	2007	Academy of Management Journal	13
26	Hausberg and Korreck	2020	Journal of Technology Transfer	13
27	Clarusse et al.	2005	Journal of Business Venturing	12
28	Cohen et al.	2019	Research Policy	12
29	Allen and McCluskey	1990	Entrepreneurship Theory and Practice	11
30	Blank	2013	Harvard Business Review	11
31	Bøllingtoft and Ulhøi	2005	Journal of Business Venturing	11
32	Rice	2002	Journal of Business Venturing	11
33	Schwartz	2013	Journal of Technology Transfer	11
34	Stam	2015	Entrepreneurial Ecosystems and Regional Policy	11
35	Teece et al.	1997	Strategic Management Journal	11

出所：筆者作成

注：29番のAllenとMcCluskeyとの論文の発行年は1991年であるが、集計上では1990年にカウントされている。

この35本の論文のうち、すでに6本は論文のデータに含まれていた。それ以外の29本のうち、他の研究に与える影響は大きいアクセラレーターに明らかに関連しないとみなされた論文は4本であり、これらを論文のデータから除外した（表1の5番、13番、25番、35番）。この結果、25本の論文を検討対象に含めることにした。これら25本のうち、Web of Science™上でデータを入手できた論文は18本、Web of Science™上にデータが示されなかったがWeb上で論文をファイルとして入手できたり、あるいは

ファイルとして入手できなかったものの論文の内容が確認できたりした論文は7本であった(表1の2番, 6番, 8番, 12番, 21番, 22番, 29番)。これら7本の論文のデータをテキストデータに手動で追加した。この手動で追加した7本の論文の参考文献は、収集した論文リスト内での引用(TLCs)を完全に反映しておらず、引用分析ができていないことをここで指摘しておく。228本の論文のデータに、影響の大きい25本の論文を追加し、最終的に本研究で検討対象とする論文は253本となった。

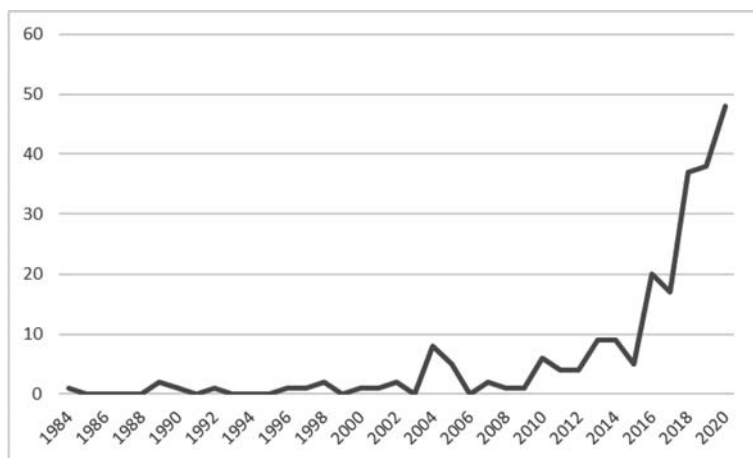
### Ⅲ 結 果

#### Ⅲ-1. データとしての検討対象論文の特徴

HistCite™では、上でとりあげた Cite Reference の機能のほかに、刊行年の傾向を示した Yearly output, 論文の著者の傾向を示した Author, 論文が掲載されたジャーナルの種別傾向を示した Journal, そして論文のキーワードの傾向を示した Word といった機能がある。以下では、これらの結果を基に、検討対象論文の特徴について説明する。

まず、Yearly output, すなわち刊行年の傾向についてみていく。本研究で収集した253本の論文のうち、2021年刊行の論文26本を除外した<sup>9</sup>、2020年までの227本の論文の刊行年の傾向を示したものが図1である。図1によると、2009年までは2004年を除いて5本以内であった論文の数が、2010年以降にその数は次第に増え始め、2016年からその数が急激に増加し、2018年以降は年に40本近い論文が刊行されたことがわかる。

図1 刊行年の傾向



出所：筆者作成

9 本研究での論文収集にあたり、Web of Science™の検索を2021年6月に実施したため、必ずしも2021年度に刊行された論文の合計を反映していないことから、刊行年の傾向の分析では2021年刊行の論文26本を除外した。

次に、Author, すなわち著者の傾向についてみていく。本研究で収集した253本の論文の著者の傾向を示したものが、次の表2ならびに表3である。表2は、Recs, すなわち収集した253本の論文の著者の、表3は、TLCS, すなわち収集した253本の論文で引用されている文献を含めた著者の、それぞれの傾向を示している。表2および表3にRecsとTLCSに並べて記載されているTGCSは、Web of Science™に収録されている文献で引用されている文献を含めた著者の数を示している。まず表2（Recsは3以上）によると、もっとも多いのが、13本の論文の著者として名を連ねているWright, M.があげられる。また、引用の影響の大きさを示すTLCS順でみた表3（TLCSは20以上のみ記載）によると、同じくWright, M.がもっとも多く、さらに表2のRecs順でも上位にあがっているSiegel, D. S.やClarysse, B., さらにVan Hove, J.らが表3のTGCS順で上位にあがっている。これらから論文の著者別にみると、Wright, M., Siegel, D. S., Clarysse, B., Van Hove, J.といった著者らの研究が、その後の研究展開に与えた影響が大きいことがわかる。

次に、Journal, すなわち収集した論文が掲載されたジャーナルの傾向についてみていく。本研究で収集した253本の論文が掲載されたジャーナルの傾向を示したものが、次の表4ならびに表5である。表4は、Recs, すなわち収集した253本の論文が掲載されたジャーナルの、表5は、TLCS, すなわち収集した253本の論文で引用されている文献が掲載されたジャーナルの、それぞれの傾向を示している。TGCSは、Web of Science™に収録されている文献で引用されている文献を含めたジャーナルの数を示している。表4によると、収集した論文がもっとも多く掲載されたのは*Technovation*であり、その収録論文数（Recs）は12本（収録論文全体の4.7%）であった。そして*Technological Forecasting and Social Change*が11本（収録

表2 論文の著者の傾向（Recs順）Recs≥3

	Author	Recs	TLCS	TGCS
1	Wright M	13	141	1564
2	Siegel DS	4	38	469
3	Clarysse B	3	96	780
4	Florio M	3	2	33
5	Van Hove J	3	54	161

出所：筆者作成

表3 論文の著者の傾向（TLCS順）TLCS≥20

	Author	Recs	TLCS	TGCS
1	Wright M	13	141	1564
2	Clarysse B	3	96	780
3	Pauwels C	1	54	158
4	Van Hove J	3	54	161
5	Siegel DS	4	38	469
6	Kohler T	1	31	83
7	Grandi A	1	29	300
8	Grimaldi R	1	29	300
9	Phan PH	2	28	387
10	Bruneel J	1	27	246
11	Groen A	1	27	246
12	Ratinho T	1	27	246
13	Chesbrough HW	1	25	128
14	Weiblen T	1	25	128
15	Mustar P	2	23	540
16	Fayolle A	1	21	118
17	Lamine W	1	21	118
18	Mian S	1	21	118
19	Bergek A	1	20	350
20	Norman C	1	20	350

出所：筆者作成



論文全体の4.3%), *Journal of Technology Transfer* が10本(収録論文全体の4.0%)と続いている。これらともに *Technology* に関連したジャーナルである点が特徴的である。*Technovation* および *Journal of Technology Transfer* は TLCS も高くなっている。収集した論文の参考文献の傾向(TLCS)を示した表5によれば, 2番目に, アントレプレナーシップ研究領域を代表する国際ジャーナルである *Journal of Business Venturing* が, さらに TLCS はそれほど高いとは言えないが, *Business Horizons* や *Harvard Business Review* といった経営実践に関連した国際ジャーナルが収集した論文に多いという点も特徴的である。

表4 論文が収集されたジャーナルの傾向 (Recs 順) Recs $\geq$ 4

	Journal	Recs	TLCS	TGCS
1	TECHNOVATION	12	165	1359
2	TECHNOLOGICAL FORECASTING AND SOCIAL CHANGE	11	3	86
3	JOURNAL OF TECHNOLOGY TRANSFER	10	56	260
4	JOURNAL OF BUSINESS VENTURING	8	75	1313
5	ACCELERATORS: SUCCESSFUL VENTURE CREATION AND GROWTH	6	7	20
6	RESEARCH POLICY	5	29	607
7	CALIFORNIA MANAGEMENT REVIEW	4	26	154
8	HARVARD BUSINESS REVIEW	4	30	882
9	SMALL BUSINESS ECONOMICS	4	19	305
10	STRATEGIC ENTREPRENEURSHIP JOURNAL	4	16	59
11	TECHNOLOGY INNOVATION MANAGEMENT REVIEW	4	2	8

出所：筆者作成

表5 論文が収集されたジャーナルの傾向 (TLCS 順) TLCS $\geq$ 10

	Journal	Recs	TLCS	TGCS
1	TECHNOVATION	12	165	1359
2	JOURNAL OF BUSINESS VENTURING	8	75	1313
3	JOURNAL OF TECHNOLOGY TRANSFER	10	56	260
4	BUSINESS HORIZONS	3	38	94
5	HARVARD BUSINESS REVIEW	4	30	882
6	RESEARCH POLICY	5	29	607
7	CALIFORNIA MANAGEMENT REVIEW	4	26	154
8	ENTREPRENEURSHIP THEORY AND PRACTICE	3	19	520
9	SMALL BUSINESS ECONOMICS	4	19	305
10	STRATEGIC ENTREPRENEURSHIP JOURNAL	4	16	59
11	ACADEMY OF MANAGEMENT JOURNAL	1	14	134
12	EUROPEAN PLANNING STUDIES	1	11	498
13	EUROPEAN JOURNAL OF INNOVATION MANAGEMENT	3	10	32
14	JOURNAL OF ENGINEERING AND TECHNOLOGY MANAGEMENT	1	10	27

出所：筆者作成

次に, Word, すなわち論文のタイトルで使用されたワードの傾向についてみていく。本研究で収集した253本の論文のタイトルで使用されたワードの傾向を示したものが,

次の表6ならびに表7である。表6は、Recs, すなわち収集した253本の論文のタイトルで使用されたワードの、表7は、TLCS, すなわち収集した253本の論文で引用されている文献のタイトルで使用されたワードの、それぞれの傾向を示している。なおTGCSは、Web of Science™に収録されている文献で引用されている文献を含めたワードの数を示している。本研究では、「accelerator」をキーワードとして含む文献を収集していることから、表6によると、複数形となっているものの、そのワードが上位（1位と3位）にあがっていることがわかる。ここで指摘できる点は、それらのワードに加えて「business」, 「entrepreneurial」, 「innovation」, 「ecosystem(s)」, 「incubators」といったワードが比較的上位にあがっていることである。また「startup」についても、表現の仕方が多様で分散しているが、「start」, 「startup」, 「startups」を足し合わせるとかなり上位にあがることになる。さらに引用の影響の大きさを示すTLCS順でみた表7によると、表6のRecs順とほぼ同じ傾向にあることがわかるが、さらに言えば「incubation」といったワードが比較的上位にあがっていることがわかる。

表6 論文タイトルで使用されているワードの傾向（Recs 順）Recs≥11

	Word	Recs	TLCS	TGCS
1	ACCELERATORS	50	152	775
2	BUSINESS	40	160	1699
3	ACCELERATOR	35	103	352
4	ENTREPRENEURIAL	30	115	2548
5	INNOVATION	30	40	797
6	ECOSYSTEM	20	39	255
7	INCUBATORS	20	159	1562
8	CASE	17	12	130
9	CORPORATE	17	70	390
10	ENTREPRENEURSHIP	17	33	552
11	NEW	17	116	963
12	START	17	62	1104
13	TECHNOLOGY	17	38	257
14	STARTUP	16	25	128
15	ANALYSIS	15	19	123
16	SOCIAL	15	10	146
17	STARTUPS	15	61	256
18	ECOSYSTEMS	14	31	1087
19	PERFORMANCE	13	12	155
20	VENTURE	13	46	534
21	MODEL	12	55	187
22	ROLE	12	30	150
23	EVIDENCE	11	3	134
24	IMPACT	11	22	137
25	RESEARCH	11	54	945
26	UNIVERSITY	11	5	100

出所：筆者作成

表7 論文タイトルで使用されているワードの傾向 (TLCS 順) TLCS $\geq$ 30

	Word	Recs	TLCS	TGCS
1	BUSINESS	40	160	1699
2	INCUBATORS	20	159	1562
3	ACCELERATORS	50	152	775
4	INCUBATION	9	128	1033
5	NEW	17	116	963
6	ENTREPRENEURIAL	30	115	2548
7	ACCELERATOR	35	103	352
8	UNDERSTANDING	4	80	227
9	INCUBATOR	8	77	1040
10	CORPORATE	17	70	390
11	START	17	62	1104
12	STARTUPS	15	61	256
13	MODEL	12	55	187
14	GENERATION	3	54	158
15	RESEARCH	11	54	945
16	VENTURE	13	46	534
17	DIFFERENT	5	41	343
18	INNOVATION	30	40	797
19	ECOSYSTEM	20	39	255
20	TECHNOLOGY	17	38	257
21	CREATION	6	36	329
22	MODELS	10	36	352
23	BUILDING	7	34	161
24	SCIENCE	6	34	485
25	ENTREPRENEURSHIP	17	33	552
26	FUTURE	5	32	434
27	BRIDGES	1	31	83
28	CORPORATIONS	2	31	86
29	ECOSYSTEMS	14	31	1087
30	ROLE	12	30	150

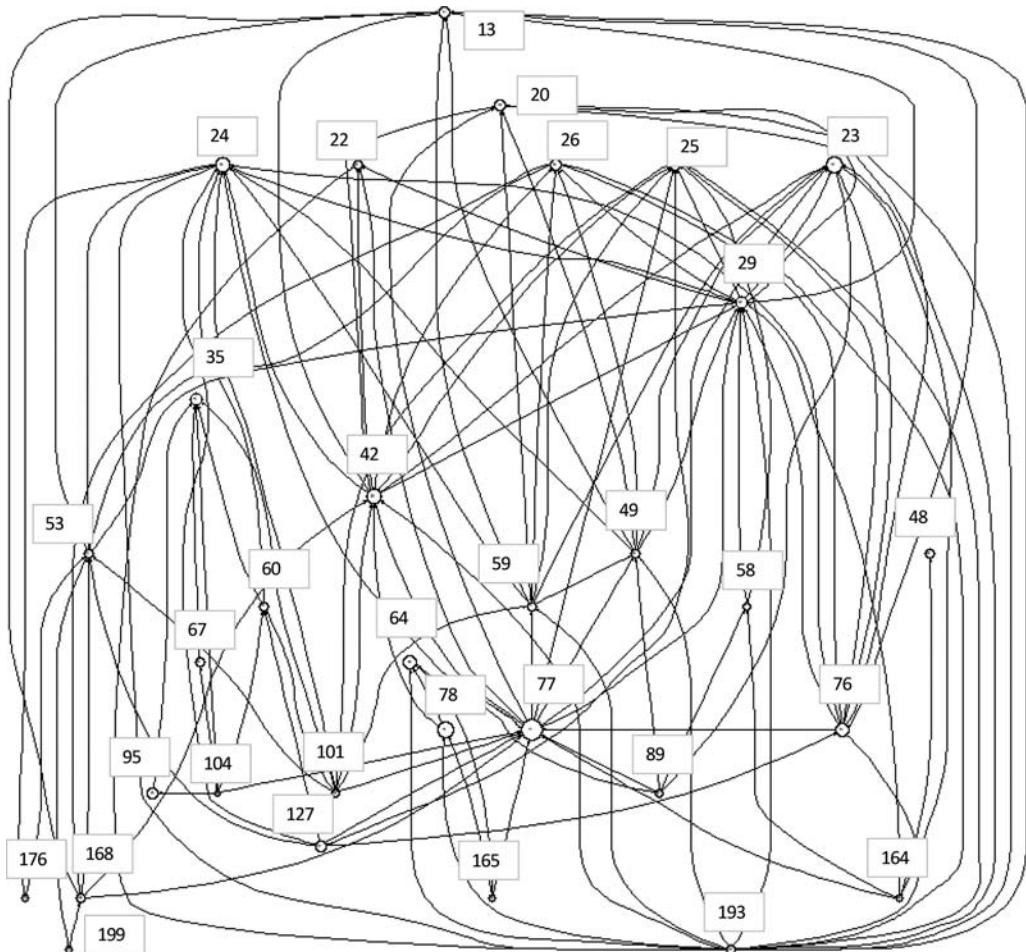
出所：筆者作成

### Ⅲ-2. 引用マッピング

続いて、HistCite™ のグラフ作成機能を使って、論文引用の系統図を示していく。本研究では、影響の大きい論文に焦点を当てる。ここで言う影響の大きさは、抽出した論文リスト内での相互引用の数 (LCS: Local Citation Score) の多さとする。この図で示されたものを引用マッピングと呼ぶ。また、図中では、検討対象となる論文が結節点としてのノードで示されており、引用数が多いほど円が大きくなっている。また引用および被引用はそれぞれの円を線で結ぶリンクとして示されている。また図中では上から下にかけて発行年が古いものから新しいものに論文が並んでいる。なお図中では Gap Year が考慮されており、該当する刊行年に論文がなくともそのスペースを含めて表記されている。

LCS の数を 5 以上とした引用マッピングを示したものが、図 2 である。ここでは、32 本の論文が抽出された。その一覧を示したものが、表 8 である。LCS の数は、論文リスト内で引用された回数であり、影響度の強さを知るためには、一般的に 5 以上を基本とすることがある（Linneluecke, 2017, p.8）。なお、LCS の数を 6 以上とした場合には、31 本であった。本研究で「accelerator」をキーワードとして収集した論文は、1980 年代半ばから一定の研究成果が発表されてきたものの、2015 年以降に急激にその数を増加させ最近になって拡がりを見せうる研究テーマであることから（図 1）、LCS の数については比較的到低い論文が多くなっていると推察される。

図 2 引用マッピング (LCS $\geq$ 5, N=32)



注：図中の数字は表 8 中の管理番号である。

出所：HistCite™ により作成

表8 引用マッピングに基づく論文リスト (LCS $\geq$ 5, N=32)

整理番号	管理番号	著者名	刊行年	ジャーナル	LCS	GCS
1	13	Rice	2002	Journal of Business Venturing	16	211
2	20	Aernoudt	2004	Small Business Economics	17	234
3	22	Carayannis and von Zedtwitz	2005	Technovation	11	133
4	23	Grimaldi and Grandi	2005	Technovation	29	300
5	24	Phan et al.	2005	Journal of Business Venturing	28	385
6	25	Clarysse et al.	2005	Journal of Business Venturing	15	376
7	26	Bollingtoft and Ulhøi	2005	Journal of Business Venturing	16	303
8	29	Bergek and Norrman	2008	Technovation	20	350
9	35	Isenberg	2010	Harvard Business Review	19	399
10	42	Bruneel et al.	2012	Technovation	27	246
11	48	Blank	2013	Harvard Business Review	11	462
12	49	Schwartz	2013	Journal of Technology Transfer	12	58
13	53	Amezua et al.	2013	Academy of Management Journal	14	134
14	58	Malek et al.	2014	Journal of Engineering and Technology Management	10	27
15	59	Barbero et al.	2014	Journal of Technology Transfer	14	65
16	60	Autio et al.	2014	Research Policy	13	469
17	64	Weiblen and Chesbrough	2015	California Management Review	25	128
18	67	Stam	2015	European Planning Studies	11	498
19	76	Mian et al.	2016	Technovation	21	118
20	77	Pauwels et al.	2016	Technovation	54	158
21	78	Kohler	2016	Business Horizons	31	83
22	89	Battistella et al.	2017	European Journal of Innovation Management	9	31
23	95	Spigel	2017	Entrepreneurship Theory and Practice	15	516
24	101	Wright et al.	2017	Journal of Technology Transfer	10	71
25	104	Roundy	2017	International Entrepreneurship and Management Journal	5	32
26	127	Goswami et al.	2018	Strategic Entrepreneurship Journal	16	51
27	164	Stayton and Mangematin	2019	Journal of Technology Transfer	6	15
28	165	Moschner et al.	2019	Business Horizons	7	11
29	168	Cohen et al.	2019	Research Policy	12	21
30	176	Cohen et al.	2019	Administrative Science Quarterly	8	31
31	193	Hausberg and Korreck	2020	Journal of Technology Transfer	13	33
32	199	Hallen et al.	2020	Organization Science	6	14

出所：筆者作成

#### IV ディスカッション

以上を踏まえ、アクセラレーターの研究潮流について、図2で示した引用マッピングから考えられる諸点について指摘していく。

第1に、2002～2005年までに発表されたそれぞれの論文が、アクセラレーターにかかる諸研究の起点となり、その後の研究に大きな影響を与えているという点である。ここで特徴的な点は、いずれの論文も、おもにインキュベータを取り扱っている点にある。つまり、アクセラレーターにかかる研究の起点がインキュベータを対象とした研究にあることが示されており、特に、起業やイノベーション活動を促進しスタートアップを含むベンチャー企業ならびに企（起）業家を支援するさまざまなインキュベータ・モ

デルへの研究視点がその議論の中心にあることがわかる（Aemoudt, 2004; Bergek and Norman, 2008; Bøllingtoft and Ulhøi, 2005; Carayannis and von Zedtwitz, 2005; Clarysse et al., 2005; Grimaldi and Grandi, 2005; Phan et al., 2005; Rice, 2002）。

2002年に発表され、その後のアクセラレーターにかかる研究の起点の1つとも言える Rice (2002) は、ビジネス・インキュベータを、「運営する地域社会と共同してビジネス支援プログラムを創出する生産者」として、そしてインキュベータに入居している企（起）業家を、これらのアウトプットである「消費者」と位置づけて捉える。そこで、生産者であるビジネス・インキュベータでの共同生産における諸要素が消費者である企（起）業家に影響を与える要因となることを明らかにしている。また、2004年に発表された Aemoudt (2004) は、インキュベータの持つ目的の違いなどから5つのタイプ（混合型インキュベータ、経済開発インキュベータ、技術インキュベータ、ソーシャル・インキュベータ、基礎研究インキュベータ）に分類する。そのうえで、アントレプレナーシップの欠如、シードファイナンスやビジネス・エンジェルとのネットワークの未発達がインキュベータ発展の大きな障壁となることを指摘している。

Carayannis and von Zedtwitz (2005) および Grimaldi and Grandi (2005) は、ともに *Technovation* の同じ巻号に掲載されているが、この巻号で何かの特集が組まれたわけではない。Carayannis and von Zedtwitz (2005) は、インキュベータを組織形態から5つに分類（大学インキュベータ、独立した商用インキュベータ、地域のビジネス・インキュベータ、企業内インキュベータ、バーチャルインキュベータ）する。そこで、これら5つの組織形態の要素とビジネス・インキュベーションのケーススタディから得られたベストプラクティスを統合し、包括的かつ独自のインキュベータ・モデル（G-RVIN）を提示している。おなじく Grimaldi and Grandi (2005) も、インキュベータを組織形態の違いから4つに分類（ビジネス・イノベーション・センター、大学ビジネス・インキュベータ、独立系プライベート・インキュベータ、企業プライベート・インキュベータ）する。そのうえで、インキュベータのビジネス運営方法の違いについて独自の「2つのインキュベーション・モデル」を提示し説明している。

これに対して、Phan et al. (2005) や Clarysse et al. (2005)、さらには Bøllingtoft and Ulhøi (2005) は、いずれも *Journal of Business Venturing* の同じ巻号に掲載されており、この巻号で Special Issue として Science Parks and Incubators というテーマで論稿の募集がなされている。Phan et al. (2005) は、サイエンスパークやインキュベータに関する既存研究の問題点を指摘したうえで、4つの分析レベル（サイエンスパークやインキュベータ自体、そこに立地する企業、これら企業に関わる企（起）業家や企（起）業家チーム、システムレベル）での検証を試みている。また Clarysse et al. (2005) は、スピニアウトする企業のためのインキュベーション戦略の違いを探り、これらスピニアウト

のプロセスに関連する3つの異なるインキュベーション・モデル（ロー・セレクトティブ・モデル，サポーティング・モデル，インキュベータ・モデル）を明らかにしている。さらに Bergek and Norman (2008) は、上記の諸研究を引用しつつ、これまでのインキュベータにかかる諸研究が単にその成果測定を重視してきた課題点を指摘する。そのうえで、目標と成果をインキュベータ・モデルに関連づけていくという全体的なアプローチの必要性を指摘し、インキュベータの成果を厳密に評価するための基礎となるフレームワークの提示を試みており、3つの特徴的な要素モデル（選択、ビジネス支援、仲介）を提案している。

第2に、2010年前後から2015年くらいまでの約5年の間に、ビジネス・インキュベータを中心としたそれまでの研究を踏まえながらも、さらに内容を掘り下げたかたちで研究が深化しているという点である。この期間の諸研究にみられる特徴は大きく2つある。その1つは、インキュベータの多様性と成果との関連についてである (Barbero et al., 2014; Bruneel et al., 2012; Malek et al., 2014; Schwartz, 2013)。Bruneel et al. (2012) は、新たなビジネスを創出、促進するためにインキュベータが世界中で設立されているとしたうえで、旧態依然のインキュベータと最新のインキュベータを比較し、サービス提供と入居する企業の選定基準の違いについて説明している。そこで、旧態依然のインキュベータでは、実際に提供されるサービス・ポートフォリオを入居企業があまり利用していない実態が指摘されており、これには入居企業の選択基準が緩い点と明確に設定された退出基準がない点に関連していると、Bruneel et al. (2012) は説明している。また、Malek et al. (2014) は、新しいベンチャーの誘致、支援、育成を目的としたインキュベーション・プログラムの一種としてアクセラレーターを紹介する。そのコアとなる能力を、5つの視点から（戦略、ガバナンス、ビジネスモデル、オペレーション、財務）から特定し、4つのタイプ（研究開発重視型、技術重視型、市場重視型、ネットワーク重視型）に類型化を試みている。なお、本研究でリストアップした文献リストのなかで、Malek et al. (2014) がはじめてアクセラレーターをキーワードとしてもちいており、アクセラレーター自体をおもな研究対象としている点には留意する必要がある。

Bruneel et al. (2012) と Malek et al. (2014) の研究は、どちらかと言えばインキュベータの多様性に重きをおいているが、これに対して成果との関連に重きをおいた諸研究がある。例えば、Schwartz (2013) は、一般的に、公的なインキュベータによって支援を受けたスタートアップの生存率は、そうでないスタートアップと比べると比較的高いと言われているものの不明な点が多いと指摘する。具体的には、Schwartz (2013) は、インキュベータとそこに入居する企業に対する長期的追跡調査から生存率と市場撤退リスクの変化を分析し、インキュベータに入居していることが必ずしも長期的な事業

存続の可能性や生存率を大きく高めることに繋がっていない点を明らかにしている。また Barbero et al. (2014) は、4つの典型的なタイプのインキュベータ（基礎研究、大学、経済開発、民間インキュベータ）に注目し、その成果たるイノベーション（製品、技術プロセス、組織イノベーション）についての分析を試みている。そこで特定のタイプのインキュベータでは、他のタイプのインキュベータに比べて製品、技術プロセスにかんするイノベーションを創出する傾向が高いことを指摘している。

2010年前後から2015年くらいまでの期間の諸研究にみられる特徴のもう1つは、起業を生み出すコンテキストに関連した事項についての言及が多くみられるという点である（Amezcuca et al., 2013; Autio et al., 2014; Isenberg, 2010; Stam, 2015）。Amezcuca et al. (2013) は、大学インキュベータを対象に、スポンサーシップという組織間の現象に焦点を当て、スポンサーシップによる組織の新規参入者を育成する能力にどのような違いがあるのか、また、その違いが創業条件にどのような効果をもたらすかなどを説明するための理論導出を試みている。そして資源の豊富さがスタートアップの生存率を必ずしも高めるものではなく、資源の種類や地理的な密度性との適合性に依存するという、すなわちコンテキストの要因が重要であることを指摘している。Autio et al. (2014) は、起業を生み出すイノベーション活動には、そのコンテキストの役割が重要であると強調し説明したうえで、起業を生み出すイノベーションとコンテキストに関する包括的なフレームワークを示している。また、Isenberg (2010) は、繁栄するアントレプレナーシップが国家や経済社会にもたらす変化を説明したうえで、これまで多くの政府が、アントレプレナーシップを育むエコシステムを構築するさいに誤ったアプローチをとっていると指摘する。そこで Isenberg (2010) は、コンテキストへの適応の重要性を念頭に「アントレプレナーシップ・エコシステム構築のための9つの処方箋」を提示している。この Isenberg (2013) は Stam (2015) に引用され、Stam (2015) は、企（起）業家もまたエコシステムの生産者であるという視点から、起業を生み出すエコシステム（entrepreneurial ecosystem）のフレームワークとシステムの条件が、アウトプットとしての特定の起業活動やエコシステムの成果といった新たな価値創造にどのようにつながるかを検討している。Isenberg (2010) は、他の文献を引用していないという意味でそれまでの研究を踏まえていないと言えるものの、後の研究に影響を及ぼすとともに、Autio et al. (2014) や Stam (2015) などによって引用され従前の議論と統合されることで研究の深化に貢献していると言えよう<sup>10</sup>。

第3に、2015年くらいから今日に至るまでに、それまでの研究内容よりもさらに細

10 その他、他の文献を引用していないという意味でこれまでの研究を踏まえていないと言えるものの後の研究に影響を及ぼした研究として、表8に示す管理番号48番のBlank (2013)、64番のWeiblen and Chesbrough (2015)がある。これら文献はどれもHarvard Business Reviewに掲載されている。



分化されたかたちで、かつ影響度合いの高い国際ジャーナルで研究成果が発表されていくようになってきているという点である。この時期の諸研究では、アクセラレーターそのものへの研究の焦点ならびにアクセラレーターに関連づけた諸概念の精緻化がなされている。この時期の諸研究のなかで、もっとも影響力があるのは、Pauwels et al. (2016) である。Pauwels et al. (2016) は、起業をいっそう強化していくためにアクセラレーターが新世代のモデルとしてどのように機能しているのか、また、既存のインキュベーションのメカニズムとどのように異なっているのかを明らかにしている。ヨーロッパの13のアクセラレーターに対する調査を行い、主要なパラメータと5つの重要な構成要素を特定することで、アクセラレーターを3つの異なるタイプ（「エコシステムを構築する」タイプ (ecosystem builder), 「取引の流れをつくる」タイプ (deal-flow maker), 「繁栄を刺激する」タイプ (welfare stimulator)）に分類している。

この Pauwels et al. (2016) の研究が発表されたあたりの時期から、アクセラレーターがエコシステムにおいて起業を生み出す重要なプレーヤーとして急速に台頭してきたことが多方に理解されはじめたと言えよう。その一方で、Hallen らが指摘するように、企（起）業家や政策立案者、学識経験者は、エコシステムにおけるアクセラレーターの有効性について疑問を呈し続けていた (Hallen et al. 2020)。この時期を境にして、アクセラレーターを対象とした研究が増加し続けていくことになるが (図1)、その研究動向は、アクセラレーターの概念やその役割などの精緻化を目指し展開していくもの、また、エコシステムに関連づけて展開していくもの、という大きく2つの潮流にわかれていくことになる。

まず、アクセラレーターの概念や役割などの精緻化を目指し展開していく研究潮流であるが、このなかには、さらに少なくとも3つの研究潮流が確認できる。その研究潮流の1つは、アクセラレーターの有効性についてその内容を精緻化していこうという研究潮流である (Cohen et al., 2019 a; Cohen et al., 2019 b; Hallen et al., 2020; Stayton and Mangematin, 2019)。Cohen et al. (2019 a) は、アクセラレーターのプログラム・デザインが、ベンチャー企業が生き残り成長するために必要な外部情報へのアクセス、解釈、処理能力にどのような影響を与えるかを探っている。ベンチャー企業や企（起）業家が抱える「限定された合理性」の課題を明らかにし、限定された合理性がベンチャー企業に与える影響は既存の企業に与える影響とは異なるとしたうえで、その課題に対処し、緩和または解決するために、アクセラレーターが採用している組織設計を明らかにしている。Cohen et al. (2019 b) は、それぞれのアクセラレーターが提供するアクセラレーター・プログラムには大きな違いがあると述べたうえで、プログラムの先行要因、組織設計、運営に関する主要な差異を、企業レベルでの起業のパフォーマンスに関する理論と関連づけ分析している。そこで、これらデザイン要素とアクセラレーター・プログラ

ムに参加した新興企業のパフォーマンスとの間の関連性を明らかにしている。さらに Stayton and Mangematin (2019) は、革新的ベンチャー企業が短期間で立ちあがることを可能とするアクセラレーターのメカニズムを検討し、アクセラレーター・プログラムにおける3つのメカニズム（サバイバル（迅速な立ち上げは生存の問題）、リソース・ネットワーク（迅速な立ち上げには既存のネットワークを活用する必要がある）、キャッチアップ（経験の浅い企（起）業家が迅速に立ち上げられるように、アクセラレーターがギャップを埋める））を明らかにしている。また、Hallen et al. (2020) は、すべてではないものの一部のアクセラレーターがベンチャー企業の発展を大幅に支援し加速させていることを明らかにしたうえで、アクセラレーターが与える効果のおもな要因は、「広範で集中的、かつペースの速いコンサルテーション」と呼ばれる新しい学習メカニズムであることを指摘している。

2つは、既存の経営理論との整合性の観点から、その内容を精緻化していこうという研究潮流である（Hausberg and Korreck, 2020）。この研究潮流に含まれる研究は、本研究でとりあげたリスト内文献のなかでは、唯一、Hausberg and Korreck (2020) があげられる。Hausberg and Korreck (2020) は、インキュベータの特殊な形態としてアクセラレーターを捉えたうえで、アクセラレーターにかんする文献のシスマティック・レビューを行っている。そこで、インキュベータを理解するためのフレームワークとして、オープン・イノベーションとソーシャル・キャピタルの各理論が資源ベース理論を補完するようになってきていることを見出ししている。さらに、民間企業のインキュベータやアクセラレーターという現象が、アントレプレナーシップの理論と実践の両面で支持されるようになってきていることを指摘している。

3つは、アクセラレーターの特定の分野や領域に特化し、その内容を精緻化していくという研究潮流である（Battistella et al., 2017; Kohler, 2016; Mian et al., 2016; Moschner et al., 2019）。Kohler (2016) ならびに Moschner et al. (2019) は、比較的新しい形態であるコーポレート・アクセラレーター（corporate accelerator）に焦点を当てている。なかでも Moschner et al. (2019) は、経営者が自社にもっとも適しているタイプを理解し選択できるよう、さまざまな企業内アクセラレーターの概要や目的、特徴を提供し、参加者やアクセラレーターの組織構造から4つのコーポレート・アクセラレーター・モデル（インハウス・アクセラレーター、ハイブリッド・アクセラレーター、パワード・バイ・アクセラレーター、コンソーシアム・アクセラレーター）に分類している。Mian et al. (2016) は、アクセラレーターを、サイエンスパーク、インキュベータとならぶイノベーションと技術志向の企（起）業家の成長を支援するための重要な政策手段としてのTBI（Technology Business Incubation）と位置づけ、技術分野に特化した起業メカニズムを検討している。また、Battistella et al. (2017) は、オープン・イノベーションの

視点から、スタートアップがアクセラレーターに参加する意義や、成功的な成長発展、生存率向上への影響を調査している。そこで、スタートアップがその「新しさ」ゆえに通常所有していない製品やマーケティングに関する相対的な経営能力不足、方向性の誤りなどに対して、アクセラレーター・プログラムが対処していることを明らかにしている。

次に、エコシステムとの関連にかかる研究潮流であるが、具体的にここでは、エコシステムに関連した理論的な検討と深化がみられる (Goswami et al., 2018; Roundy, 2017; Spigel, 2017; Wright et al., 2017)。Spigel (2017) は、エコシステムの理論的な説明を試みている。エコシステムとは、企(起)業家に利益や資源を提供する10の要素から構成されるものであるとし、それらを文化的、社会的、物質的属性の3つに大別したうえで、これらの属性の関係性がエコシステムを再生産すると説明している。そこで Spigel (2017) は、アクセラレーターを物質的属性に分類し支援サービス/組織の1つに位置づけている。また、Roundy (2017) は、エコシステムにおける文化的な力が、エコシステム、組織のアクター、個人というレベルに影響することで、どのように発展し形成されるかがこれまでの研究では明らかでないとし、その理論的検討を試みている。具体的には、インキュベータ、アクセラレーター、中小企業振興センターなどの中間組織では、起業を生み出す市場とコミュニティという2つの支配的な制度の論理 (dominant institutional logics) が組み合わせられ (中間組織がハイブリッド型になる)、エコシステムは、これらの影響を受けることになる」と説明している。また、ハイブリッド型中間組織の間にみられるエコシステム内でのばらつきや変化が、結果的にエコシステム内のアントレプレナーシップの多様性を生み出すと指摘している。他方、Wright et al. (2017) は、学生の起業プログラムに特化し、学生がスタートアップを成功させるために必要なエコシステムを理解するためのフレームワークを提案している。そのなかで、Wright et al. (2017) は、学生のための企(起)業家エコシステムには様々なものが存在しており、主に企(起)業家養成コース、インキュベーター、アクセラレーター、助成金、ビジネスプランコンテストなどがあると説明している。さらに Goswami et al. (2018) は、特定の地域でのエコシステムの発展におけるアクセラレーターの役割に焦点をあて、(メゾレベルに存在する)アクセラレーターの専門性が、(マイクロレベルの)創業者と(マクロレベルの)エコシステムの間をどのように仲介しているかについて理論化を試みている。具体的には、アクセラレーターの4種類の専門知識(接続、開発、調整、選択)が、ステークホルダーのエコシステムへのコミットメントを高め構築すると説明し、より広範でエコシステムの持つ全体的な起業を生み出す能力を発展させることで、個々のスタートアップの成功(または急速な失敗)を可能にするとしている。

## V 小 結

本研究では、アクセラレーターにかかる文献を体系的に整理し、その研究潮流を確認していくことを目的とし、システマティック・レビューとして HistCite™ をもちいた引用分析を行った。その結果、次の諸点を明らかにした。

第1に、2002～2005年までに発表されたそれぞれの論文が、アクセラレーターにかかる諸研究の起点となり、その後の研究に大きな影響を与えていた。特にアクセラレーターにかかる研究の起点がインキュベータを対象とした研究にあることが示されており、さまざまな支援によって起業を生み出すモデルとして捉えられていることが指摘できる。

第2に、2010年前後くらいから2015年くらいまでの約5年の間に、ビジネス・インキュベータを中心としたそれまでの研究を踏まえながらも、さらに内容を掘り下げたかたちで研究が深化していた。具体的に、特徴の1つには、インキュベータの多様性と成果との関連について、特徴の2つには、起業を生み出すコンテキストに関連した事項について、それぞれの言及が多くみられた。

第3に、2015年くらいから今日に至るまでに、それまでの研究内容よりもさらに細分化されたかたちで、かつ影響度合いの高い国際ジャーナルで研究成果が発表されていくようになっていた。この時期の諸研究のなかでもっとも影響力がある Pauwels et al. (2016) の研究に特徴的にみられるように、この時期からアクセラレーターそのものならびにアクセラレーターに関連づけた諸概念の精緻化が進められていく。ここでは大きく2つの研究潮流があり、アクセラレーターの概念やその役割などの精緻化を目指し展開していくもの、また、エコシステムに関連づけて展開していくもの、といった潮流にわかれていくことになる。また、アクセラレーターの概念やその役割などの精緻化を目指し展開していく研究潮流のなかには、少なくとも3つの研究潮流が確認できる。具体的に、1つは、アクセラレーターの有効性についてその内容を精緻化していくもの、2つは、既存理論との整合性との観点から、その内容を精緻化していくもの、そして3つは、アクセラレーターの特定の分野や領域に特化し、その内容を精緻化していくもの、がみられた。

本研究では、アクセラレーターにかかる文献を体系的に整理し、その研究潮流を確認していくことを目的としていたため、各々の研究の概略を基に、アクセラレーターにかかる研究潮流の全体像を明示することに重きをおいた。この研究潮流は、アクセラレーターにかかる研究動向の理解に大きく貢献するものである。しかしながらアクセラレーターに関連する先行研究の動向を明らかにすることにとどまっており、アクセラレー

ターを議論するさいに不可欠な要素やこれらの要素から構成される分析モデルについては明らかにすることができていない。これらを明らかにすることにより、アクセラレーター概念のさらなる精緻化につなげていくことができると期待される。今後の研究課題としたい。

#### 参考文献

- Aernoudt, R. (2004) "Incubators: Tool for entrepreneurship?," *Small Business Economics*, 23: 127-135.
- Allen, D. N. and McCluskey, R. (1991) "Structure, policy, services, and performance in the business incubator industry," *Entrepreneurship Theory and Practice*, 15(2) : 61-77.
- Amezcuca, A. S., Grimes, M. G., Bradley, S. W., and Wiklund, J. (2013) "Organizational sponsorship and founding environments: A contingency view on the survival of business-incubated firms," *Academy of Management Journal*, 56(6) : 1628-1654.
- Autio, E., Kenney, M., Mustar, P., Siegel, D., and Wright, M. (2014) "Entrepreneurial innovation: The importance of context," *Research Policy*, 43(7) : 1097-1108.
- Barbero, J. L., Casillas, J. C., Wright, M., and Garcia, A. R. (2014) "Do different types of incubators produce different types of innovations?," *Journal of Technology Transfer*, 39: 151-168.
- Battistella, C., De Toni, A. F., and Pessot, E. (2014) "Open accelerators for start-ups success: A case study," *European Journal of Innovation Management*, 20(1) : 80-111.
- Bergek, A. and Norrman, C. (2008) "Incubator best practice: A framework," *Technovation*, 28: 20-28.
- Blank, S. (2013) "Why the lean start-up changes everything," *Harvard Business Review*, 91(5) : 63-72.
- Bøllingtoft, A. and Ulhøi, J. P. (2005) "The networked business incubator: Leveraging entrepreneurial agency?," *Journal of Business Venturing*, 20: 265-290.
- Bruneel, J., Ratinho, T., Clarysse, B., and Groen, A. (2012) "The evolution of business incubators: Comparing demand and supply of business incubation services across different incubator generations," *Technovation*, 32: 110-121.
- Carayannis, E. G. and von Zedtwitz, M. (2005) "Architecting gloCal (global-local), real-virtual incubator networks (G-RVINS) as catalysts and accelerators of entrepreneurship in transitioning and developing economies: Lessons learned and best practices from current development and business incubation practices," *Technovation*, 25: 95-110.
- Clarysse, B., Wright, M., Lockett, A., Van de Velde, E., and Vohora, A. (2005) "Spinning out new ventures: A typology of incubation strategies from European research institutions," *Journal of Business Venturing*, 20: 183-216.
- Cohen, S. (2013) "What do accelerators do? Insights from incubators and angels," *Innovations*, 8(3-4) : 19-25.
- Cohen, S., Bingham, C. B., and Hallen, B. L. (2019 a) "The role of accelerator designs in mitigating bounded rationality in new ventures," *Administrative Science Quarterly*, 64(4) : 810-854.
- Cohen, S., Fehder, D. C., Hochberg, Y. V., Murray, F. (2019 b) "The design of startup accelerators," *Research Policy*, 48: 1781-1797.
- Crîșan, E. L., Salanță, I. I., Beleiu, I. N., Bordean, O. N., and Bunduchi, R. (2019) "A systematic literature review on accelerators," *Journal of Technology Transfer*, 46: 62-89.
- Drori, I. and Wright, M. (2018) "Accelerators: Characteristics, trends and the new entrepreneurial ecosystem," in Wright, M. ed., *Accelerators: Successful venture creation and growth*, 1-20, Cheltenham: Edward Elgar Publishing.
- Eisenhardt, K. M. (1989) "Building theories from case study research," *Academy of Management Review*, 14(4) : 532-550.

- Eisenhardt, K. M. and Graebner, M. E. (2007) "Theory building from cases: Opportunities and challenges," *Academy of Management Journal*, 50(1) : 25-32.
- Garfield, E. (1979) "Is citation analysis a legitimate evaluation tool?," *Scientometrics*, 1(4) : 359-375.
- Gonzalez-Uribe, J. and Leatherbee, M. (2018) "The effects of business accelerators on venture performance: Evidence from start-up Chile," *The Review of Financial Studies*, 31(4) : 1566-1603.
- Goswami, K., Mitchell, J. R., and Bhagavatula, S. (2018) "Accelerator expertise: Understanding the intermediary role of accelerators in the development of the Bangalore entrepreneurial ecosystem," *Strategic Entrepreneurship Journal*, 12(1) : 117-150.
- Grimaldi, R. and Grandi, A. (2005) "Business incubators and new venture creation: An assessment of incubating models," *Technovation*, 25: 111-121.
- Gundolf, K. and Filser, M. (2013) "Management research and religion: A citation analysis," *Journal of Business Ethics*, 112: 177-185.
- Hackett, S. M. and Dilts, D. M. (2004) "A systematic review of business incubation research," *Journal of Technology Transfer*, 29: 55-82.
- Hallen, B. L., Bingham, C. B., and Cohen, S. L. (2014) "Do accelerators accelerate? A study of venture accelerators as a path to success," *Academy of Management Proceedings*, 2014(1) doi.org/10.5465/ambpp.2014.185
- Hallen, B. L., Cohen, S. L., and Bingham, C. B. (2020) "Do accelerators work? If so, how?," *Organization Science*, 31(2) : 378-414.
- Hathaway, I. (2016) "What startup accelerators really do," *Harvard Business Review*. Retrieved from <https://hbr.org/2016/03/what-startup-accelerators-really-do>
- Hausberg, J. P. and Korreck, S. (2020) "Business incubators and accelerators: A co-citation analysis-based, systematic literature review," *Journal of Technology Transfer*, 54(1) : 151-176.
- Hochberg, Y. V. (2016) "Accelerating entrepreneurs and ecosystems: The seed accelerator model," *Innovation Policy and the Economy*, 16(1) : 25-51.
- Howells, J. (2006) "Intermediation and the role of intermediaries in innovation," *Research Policy*, 35(5) : 715-728.
- Isabelle, D. A. (2013) "Key factors affecting a technology entrepreneur's choice of incubator or accelerator," *Technology Innovation Management Review*, 16-22.
- Iserberg, D. J. (2010) "How to start an entrepreneurial revolution," *Harvard Business Review*, 88(6) : 41-50.
- Kanbach, D. K. and Stubner, S. (2016) "Corporate accelerators as recent form of startup engagement: The what, the why, and the how," *The Journal of Applied Business Research*, 32(6) : 1761-1776.
- Kohler, T. (2016) "Corporate accelerators: Building bridges between corporations and startups," *Business Horizons*, 59: 347-357.
- Kraus, S., Filser, M., O'Dwyer, M., and Shaw, E. (2014) "Social Entrepreneurship: An exploratory citation analysis," *Review of Managerial Science*, 8: 275-292.
- Liñán, F. and Fayolle, A. (2015) "A systematic literature review on entrepreneurial intentions: citation, thematic analyses, and research agenda," *International Entrepreneurship and Management Journal*, 11(4) : 907-933.
- Linnenluecke, M. K. (2017) "Resilience in business and management research: A Review of influential publications and a research agenda," *International Journal of Management Review*, 19: 4-19.
- Malek, K., Maine, E., and McCarthy, I. P. (2014) "A typology of clean technology commercialization accelerators," *Journal of Engineering and Technology Management*, 32: 26-39.
- Mason, C. and Brown, R. (2014) "Entrepreneurial ecosystems and growth oriented entrepreneurship," *Background paper for workshop organized by the OECD LEED Programme and the Dutch Ministry of Economic Affairs on Entrepreneurial Ecosystems and Growth Oriented Entrepreneurship*, 7 th November 2013.
- Mian, S., Lamine, W., and Fayolle, A. (2016) "Technology Business Incubation: An overview of the state of

- knowledge," *Technovation*, 50-51: 1-12.
- Moschner, S.-L., Fink, A. A., Kurpjuweit, S., Wagner, S. M., and Herstatt, C. (2019) "Toward a better understanding of corporate accelerator models," *Business Horizons*, 62, 637-647.
- Ojaghi, H., Mohammadi, M., and Yazdani, H. R. (2019) "A synthesized framework for the formation of startups' innovation ecosystem" *Journal of Science and Technology Policy Management*, 10 (5) : 1063-1097.
- Pauwels, C., Clarysse, B., Wright, M., and Van Hove, J. (2016) "Understanding a new generation incubation model: The accelerator," *Technovation*, 50-51: 13-24.
- Phan, P. H., Siegel, D. S., and Wright, M. (2005) "Science parks and incubators: Observations, synthesis and future research," *Journal of Business Venturing*, 20: 165-182.
- Pittaway, L., and Cope, J. (2007) "Entrepreneurship education: A systematic review of the evidence," *International Small Business Journal*, 25(5) : 479-510.
- Podsakoff, P. M., MacKenzie, S. B., Bachrach, D. G., and Podsakoff, N. P. (2005) "The influence of management journals in the 1980s and 1990s," *Strategic Management Journal*, 26(5) : 473-488.
- Radojevich-Kelley, N. and Hoffman, D. L. (2012) "Analysis of accelerator companies: An exploratory case study of their programs, processes, and early results," *Small Business Institute Journal*, 8(2) : 54-70.
- Rice, M. P. (2002) "Co-production of business assistance in business incubators: An exploratory study," *Journal of Business Venturing*, 17: 163-187.
- Roundy, P. T. (2017) "Hybrid organizations and the logics of entrepreneurial ecosystems," *International Entrepreneurship and Management Journal*, 13: 1221-1237.
- Schwartz, M. (2013) "A control group study of incubators' impact to promote firm survival," *Journal of Technology Transfer*, 38: 302-331.
- Seed-DB (2018) "Seed-DB charts and tables", Retrieved 22 March 2022, <https://www.seed-db.com/chart-and-tables>.
- 関智宏 (2021) 「企業家活動プロセスをめぐる諸研究をマッピングする——経営研究における影響力のある文献のシステムティック・レビュー——」同志社大学商学会『同志社商学』72(5) : 929-969.
- 関智宏・曾我寛人 (2022) 「中小企業によるアントレプレナーシップとしての国際化にかんする研究動向——Hist Cite によるシステムティック・レビュー——」同志社大学商学会『同志社商学』73(5) : 21-43。
- Small, H. G. (1978) "Co-citation context analysis and the structure of paradigms," *Journal of Documentation*, 36(3) : 183-196.
- Spigel, B. (2017) "The relational organization of entrepreneurial ecosystems," *Entrepreneurship Theory and Practice*, 41(1) : 49-72.
- Stam, E. (2015) "Entrepreneurial ecosystems and regional policy: A sympathetic critique," *European Planning Studies*, 23(9) : 1759-1769.
- Stayton, J. and Mangematin, V. (2019) "Seed accelerators and the speed of new venture creation," *Journal of Technology Transfer*, 44: 1163-1187.
- 田代智治・岸本千佳司 (2021) 「エコシステムにおけるアクセラレーターの発展と重要性——定義とその特徴の体系的・包括的理解——」大阪経済大学中小企業・経営研究所『中小企業季報』2021 (3・4) (通号 199 号), 11-28。
- Teece, D. J., Pisano, G., and Shuen, A. (1997) "Dynamic capabilities and strategic management," *Strategic Management Journal*, 18(7) : 509-533.
- Tranfield, D., Denyer, D., and Smart, P. (2003) "Towards a methodology for developing evidence: Informed management knowledge by means of systematic review," *British Journal of Management*, 14(3) : 207-222.
- Weiblen, T. and Chesbrough, H. W. (2015) "Engaging with startups to enhance corporate innovation," *California Management Review*, 57(2) : 66-90.

- Wright, M., Siegel, D. S., and Mustar, P. (2017) "An emerging ecosystem for student start-ups," *Journal of Technology Transfer*, 42: 909-922.
- Xi, J. M., Kraus, S., Filser, M., and Kellermanns, F. W. (2015) "Mapping the field of family business research: Past trends and future directions," *International Entrepreneurship and Management Journal*, 11(1) : 1-20.